Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka 2017-10-15

APM news 179

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館（旧北越銀行宮内支店）

〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233

第39回美術館大学 第二部 8月4日(金)pm3:30～pm5:00／受講者：91名

「建築における『パラダイム』について」2

講師：高田清太郎、高田清之介
進行：秋山孝

まず高田会長は「住まい方を提案するのが建築家である」と考える。この考え方の元、高田会長は建築を、いや、人々の住まいを作り続けてきた。さらに、紀元前に活動した建築家ヴィトルヴィウスは「建築は強・用・美の総合芸術である」と建築観を提唱したが、高田会長はこの3つの大切な要素にさらに「COST（コスト）」と「CONCEPT（コンセプト）」の2つの要素（2C要素）が重要であると考える。それにより「おもしろさ」「楽しさ」が建築に加わる。この2C要素こそが高田建築事務所の独自性の素なのだ。

考え方の基本を確認した上で「環境軸」から同社のパラダイムを考える。そのキーワードは「VASIRU＝場知る」である。（高田会長は言葉の持つ力を大切に考え、このような独自の造語も得意としている。）文字通り「場（環境）を知る」ことをとても重要としている。建築という概念が生まれる以前の古代から生き物はその風土故の居住を形成し、暮らしてきた。気候風土にあった建築であることが、心地よい暮らしを形成する上でとても重要なのである。同社がある新潟県の風土の特徴といえば、雪が大きい。雪に耐え、また上手く付き合っていけるかどうかが、この地域の建物では重要視される。雪の降る地域と降らない地域の建物では考え方は違ってくる。また、環境という視点では、気候だけでなく周辺の環境からヒントを探し出す場合もあるという。例えば、近所の公園の蓮の葉をモチーフに設計した教会である。さらには、精神病棟の設計には、長期入院を要する人へのケアに配慮した設計をした。その建物の利用状況という点での環境に焦点を当てたケースである。

次に「言葉軸」である。既述した通り、高田会長は独自の造語を得意としているが、建物にそれぞれ名称をつけている。それは技術的な部分から名付ける場合もあるし、建て主との打ち合わせの内容から名付けられる場合もある。例えば、やじろべえの原理を利用し生み出した耐雪構造を用いた「やじろべえ住宅」、子供にとって楽しい家を作りたいという想いからの「ドラえもん住宅」などである。そのそれぞれの名称が、建築をするにあたってのムーブメントを起こすためのパラダイムとなるという。

最後に高田建築事務所の思考のパラダイムについて触れた。同社が必要とされる会社になるために必要な事として、「3つの『NE』がい（願い）」を掲げている。「Needs」「Neo」「Nesessary」だ。1つ目の「Needs」は客の希望・想いをしっかりと聞き取り、形にすること。これだけでは不十分であり、そこに新たなアイディアを付け加える事が重要だという。それが2つ目の「Neo」である。一度作ったもの（Needs）を少し離れて見てみる、そしてもう1度作る（Neo）。それはすなわちパラダイムシフトである。それができて初めて必要とされる存在になれる（Necessary）という。既存のパラダイムだけで終わらず、さらなるパラダイムを構築し、客の希望以上の答えを出す。この事が高田建築事務所がこれまで発展し、必要とされ続けている理由なのだ。これは建築のみならず、全ての業界に通づる考え方なのではないだろうか。（たかだみつみ・APM事務局長、学芸員／APM公式ホームページより抜粋）

注）思考や概念、規範や価値観が、枠組みごと移り変わること。